

平成24年9月25日

津市総合計画審議会

会長 武田保雄様

久居地区地域審議会

会長 大幡貞夫

津市総合計画後期基本計画の策定に係る意見・提言について

現在、市で進められている平成25年度から平成29年度を計画期間とする津市総合計画後期基本計画の策定に係り、当審議会では今後の地域の目指すべき方向性等について協議を行い、同計画の策定に当たっての現時点における当地域からの意見・提言を以下のとおり、とりまとめましたので、同計画に係る津市長への答申に当たっては、この内容を十分尊重していただきますようお願いいたします。

記

当地域のまちづくりについて、当審議会において、これまで様々な観点から議論してきた内容について、以下の3項目（久居地域が目指すべき将来像、まちづくりの課題、課題解決のための方策）に分け整理いたしました。

1 久居地域が目指すべき将来像

今後において、持続的に地域が輝いていくためには、「子供たちが輝いている」、「働き盛りのお父さん、お母さんが輝いている」、「子育てを終え、人生後半にさしかかった人たちが輝いている」こと、つまり、「すべての人が輝き、地域に活気がある」まちづくりを進める必要があります。

特に、当地域は、自治会を始めとする市民活動が活発な地域であり、その特色をさらに伸ばしていかなければなりません。しかし、昨今、少子高齢化を始めとする地域を取り巻く様々な社会経済情勢等の変化により、この古き良き地域性の維持が難しくなっています。

今後もこれを維持向上させていくためには、日ごろから地域住民のコミュニティを大切にし、連帯感を深めていく努力が必要であり、日常生活においても個人（家庭）が行うこと、地域住民と協力して行うことをそれぞれ認識し、家庭・地域の連帯意識のもとでの協力体制づくりが重要です。

このため当地域では、年代、性別など多様な人々が、市民参加のまちづくりを推進し、市民と行政が対等な立場でまちづくりを進め、「公助」を待つのではなく、住民一人ひとりが持てる力を出し合って、「自助」、「共助」に取り組む、

地域の絆を糧にした新たなコミュニティの構築を目指していきます。

また、当地域は、比較的平坦な高台が多く、地盤も強く、地震、洪水、津波等の心配も少なく、企業立地の最適地と考えます。新産業基盤の形成を目指し、土地利用を再検討するとともに、入り組んだ生活道路や空き家・老朽家屋の顕在化している地域の区画整理等、防災機能も視野に入れた住環境の整備により、勤住接近のまちづくりを進め、「環境と共生し、心豊かで元気あふれる美しい県都」を先導する役割を果たせる地域づくりを進めます。

次に、各地域の特性に応じたまちづくりについては、津市総合計画では、久居地域には、3つの土地利用のゾーニングのうち、「都市ゾーン」と「農住ゾーン」の2つが存在しており、地域かがやきプログラムのエリアについても、前者が東部エリア、後者が中部エリアとなっています。

東部エリアの久居駅周辺地区は、市南部の玄関口として副都市核として位置づけられており、交流拠点としての都市機能の整備が進められています。同エリアでは、現在検討中のポルタひさいの再生及び久居駅東側周辺地区整備事業に絡めて、将来を見据えた整備方針を立て、駅前の利便性を活かし、市民ホールや市民会館など賑わい性を高めるための都市機能の整備・充実を進めるとともに、中心市街地の商店街の活性化を促進するための、副都市核に相応しい整備が急務と考えます。

また、中部エリアは、本市の中でも、特に豊かな自然環境に恵まれた地域で、榊原温泉、青山高原がレクリエーションの拠点として位置付けられており、観光・レクリエーション、自然環境保全への取組が期待されます。同エリアでは、県道青山高原公園線、県道亀山白山線等アクセス道路の早期整備とともに、道の駅、自然学校などの拠点施設を整備し、農商工が連携する第6次産業の育成など農業の振興、加工場の建設、ジビエ料理のブランド化等による獣害対策と食肉活用、自然環境を活かした木工、竹細工などの体験学習、森林セラピー、ウォーキングなどの健康学習の推進、農家民宿、農作業体験施設などグリーンツーリズムに対応した環境整備など、観光型から体験型への転換を視野に、榊原地域全体の活性化を目指します。

2 地域課題については、次の点に留意されたい。

久居地域におけるまちづくりの課題について、以下のとおり整理しましたので、計画策定に当たっては、これらの諸課題を明記の上、実効性のある策定を進められたい。

○商店街を含む久居駅周辺地区の整備・活性化及びポルタひさいの再生

久居駅を中心とした中心市街地では、車社会の進展、消費者の生活様式の多様化等の影響を受け、人口の郊外への移転、大規模小売店舗の郊外展開等が進むとともに、人口の減少、商店街の衰退等が進行し、空き家・老朽家屋が顕在化している。ポルタひさいの再生を契機とした、駅東西の活性化及び商店街の

活性化が必要である。

○文化交流の拠点づくり

久居市民会館は、建物、設備全般が老朽化し、利用者の減少が進んでいる。駅東への文化拠点の早期整備が求められている。

○津波の危険がない地域性を活かしたまちづくり

当地域は、比較的平坦な高台が多く、地盤も強く、地震、洪水、津波等の心配も少ないことから、このような地域の強みを活かした新たな発想のまちづくりが求められている。

○防災を核とした地域づくり

市内各地域で防災について取組が見られるものの、まだ久居地域では切迫感がない。家族では、どこの避難所に集まるとの話し合いは持っていますが、地域でその話し合いが持たれていない。地域ぐるみの取り組みが必要である。

○地域のコミュニケーションが充実したまちづくり

少子高齢化、人口減少が進む中で、地域の住民同士が支え合い、助け合う活動の担い手や後継者の不足、また、活動そのものに対する関心の低下が懸念されることから、時代の流れに対応した、地域の老若男女が集い、地域の活力と一体感を醸成することができる新たなコミュニティの構築が必要である。

○男女共同参画のまちづくり

久居地域では、自治会会長、体育振興会、PTA等の会長を始め役員の女性比率は未だ低い。

津市は、男女共同参画宣言都市であるが、市域全体、住民にも行政にも、その自覚と責任に欠けるように思えることから、先導的役割を担えるような取り組みが必要である。

○榊原地域の活性化

全国有数の泉質を有する榊原温泉においては、年々温泉客の減少が進んでいる。また、榊原地域においても、定住人口の減少や高齢化、耕作放棄地の増加、里山の荒廃、獣害問題など地域そのものも、将来に大きな不安を抱えている。

このようなことから、観光資源を積極的に活用することで、より多くの観光客を呼び込むことが必要であるとともに、地域の活性化にもつながる取り組みが必要である。

3 地域かがやきプログラムについては、次の施策を掲げられたい。

地域かがやきプログラムを始めとする地域が持続的に輝くための施策の推進に当たっては、これらを踏まえた推進を図りたい。

○商店街を含む久居駅周辺地区の整備・活性化及びポルタひさいの再生

- ・「副都市核」としての将来を見据えた整備方針を後期基本計画へ明記するとともに、長期展望に立った開発を進める。
- ・ポルタの再生は、どのように市民にとって有効に活用されるか、活用できるかをポイントに早期解決をお願いしたい。
- ・久居駅の南と北に近鉄の踏切があるが、朝夕かなり渋滞を起こしているので、久居駅東の開発の際には考慮してほしい。
- ・現在、駐車場があるが、近鉄を利用している人が恒常的に利用しているので、新しい施設ができた場合には、近鉄利用者の駐車場を確保したうえ、新しい施設の利用者の駐車場を確保してほしい。
- ・公民館機能をポルタひさいに移転することで、鉄道沿線という特性を活かした、利用者の拡大が見込めるのではないか。
- ・近鉄と三交バスの利用者を取り込んだ振興策を考える。
- ・久居商店連盟が核となり、商店街の活性化に取り組まなければならない。
- ・中心商店街の空洞化による買い物難民を解消する。
- ・入り組んだ生活道路や、空き家・空き店舗、老朽家屋が顕在化している地域の区画整理を実施する。

○文化交流の拠点づくり

- ・市民ホールは、1,000席規模のホール、音響設備は、オーケストラも演奏できるものとし、市民・地域住民だけが使うのではなく、鉄道沿線という特性を活かし、市外から利用者・観客を呼べるようなものにするとともに、駅前という中学生・高校生が集まりやすい特徴を活かし、クラブ活動や発表会等「若い人が集まる」ホールづくりをする。
- ・企画力・営業力等に重点を置き、平日の稼働率も上げる。
- ・郷土の文化財、資料を、地元で保存、展示できるよう、郷土資料館を建設し、市史編纂の拠点とする。

○津波の危険がない地域性を活かしたまちづくり

- ・新産業基盤の形成を目指し、土地利用を再検討し、土地の使用目的を明示した土地利用図を作成するとともに、入り組んだ生活道路や空き家・老朽家屋の顕在化している地域の区画整理等、防災機能も視野に入れた住環境の整備により、勤住接近のまちづくりを進め、定住人口の増加を促進する。

○防災を核とした地域づくり

- ・小学校区単位で、協議会や防災組織を立ち上げて、避難及び避難所運営訓練

などをする必要があり、組織化は急務。

- ・老若男女、地域の隠れた人材を見つけ出して、組織化、交流を進めることが、少子高齢化の地域の介護力のアップにも繋がる。
- ・行政による支援（公助）には限界がある。災害が発生したら、「自分の身は自分で守る」こと（自助）が原則。自助努力に加え、地域住民同士の助け合う気持ちと行動（共助）が大切。日ごろから地域住民同士が力を合わせて、地域の課題の解決に向けて取り組み、災害時には被害を最小限に食い止めるために協力して取り組んでいくことが重要。

○地域のコミュニケーションが充実したまちづくり

- ・それぞれの地域で、子供たちが元気、働き盛りのお父さん・お母さんたちが元気、高齢者が元気、それぞれ皆さんが元気になれば、地域も全体が元気になる。
- ・公民館を拠点として、地域の課題解決、地域社会づくり、社会教育など、地域の人づくりに積極的に取り組む。
- ・体育面では、津市スポーツ施設整備基本構想が計画されており、スポーツのほうではこれを拠点に、文化面では、地域の公民館活動を、この2つを車の両輪として、それぞれが元気になる、そんなまちづくりを提案したい。
- ・旧来の自治会を主体とした地域づくりだけでなく、年代・性別など多様な人々が地域づくりに関わり、グループや団体を立ち上げ、ネットワーク化する。
- ・市民参加のまちづくりを推進し、市民と行政が対等な立場でまちづくりを進め、「公助」を待つのではなく、住民一人ひとりが持てる力を出し合って、「自助」、「共助」に取り組む、地域の絆を糧にしたコミュニティの構築が必要。
- ・空き家、空き店舗等を利用し、小集会所（ONEコインサロン、いきいきサロンなど）をつくる。
- ・合併したこともあるので、10の旧市町のいいところを取り入れた、新・津音頭をつくってはどうか。
- ・こどもまつりの開催、高通太鼓の創設などにより交流を促進する。

○男女共同参画のまちづくり

- ・当地域を男女共同参画モデル地区として、10地域に先駆け、かつて条例を持っていた地域（旧久居市）として、男女共同参画の理念に基づいたまちづくりを実践し、他地域にその成功例を示すことで、男女共同参画都市、津市の底上げを図ってはどうか。

○榊原地域の活性化

- ・観光を軸に、長年取り組まれてきたが、期待された成果が出ていない。恵まれた自然環境や、せっかくの良い温泉資源を生かし、「観光」から「体験」へ

の転換など、新たな発想の取り組みが必要。

- ・道の駅を整備し、足湯や、農産物、特産品の販売、地産地消の食事を提供するとともに、周囲を四季折々の花畑で彩る。
- ・山、川、田んぼ、畑や恵まれた自然環境を活かして、都会からファミリー、子供たちが来て、いろいろな体験ができるキャンプ場や自然学校などの施設を整備して、地域の活性化に繋げる。
- ・加工場の建設、ジビエ料理のブランド化等による獣害対策と食肉活用を図る。
- ・農家民宿、農作業体験施設などグリーンツーリズムに対応した環境整備を進める。
- ・「津なぎさまち」を玄関口として、中部国際空港から国内外の観光客を呼び込む。
- ・まちづくり、村おこしなどの成功した事例をみると、心血を注いだリーダーシップのある方がいるので、そういう指導者を公募で募集してはどうか。
- ・農産物の直売をするということは、農家の60歳代、70歳代の方にとっては、そのことで、とても健康になり、意欲的にもなる。農村の女性、高齢者の健康を維持していくためにも、とても大切。
- ・榊原に四季折々の風景写真の絶景ポイントを設置し、フォトコンテストを行うなど、全国のカメラマンを集めるイベントをする。
- ・榊原の山全体に桜、紅葉を植え、春と秋の景観をつくるなど榊原の里山による景観づくりをする。

○観光振興

- ・ハチ公は、全国だけでなく、世界的にも名前を知られている。上野博士とハチ公の銅像の建立を契機として、津市が関わっていくことが、観光資源に結び付いていく。
- ・7年後の平成31年に、初代藩主藤堂高通公が久居藩を立藩して、350年という記念の年になる。翌年には、居所を定めて久居と称し、城下町を建設し、その翌年に高通公が入城したことから、7年目、8年目、9年目の3年間、藤堂高通公久居藩立藩350年記念行事を行いたい。
- ・久居駅前に観光看板がほしい。